

2020年

風光れ

人権のたより 通算第 25 号 7 月 17 日発行

三重県立津東高等学校

みなさん、こんにちは。人権教育推進係の山本です。



最近の私は、NHKの連続テレビ小説「エール」を毎日楽しく視聴しています。昭和に活躍した実在の作曲家・古関裕而とその妻をモデルとしたテレビドラマで、人々の心に寄り添う数々の名曲を生み出していく夫・裕一とそれを支える妻・音の波瀾万丈の生涯が、フィクションで描かれています。登場人物のキャラクターが皆、本当に魅力的なのですが、特に、古川雄大さん演じる「ミュージックティーチャー」こと御手洗清太郎が世間の注目を集め、登場回は必ずツイッターのトレンドに上がり、「元気が出る」「自粛中でも割と幸せ」と話題になるほど人気になっています。

御手洗は音の音楽の先生で、ドイツに留学経験がある人物。会話の途中に英単語を挟み、常にオーバーリアクションで、自身を「先生」と呼ぶ音に、いちいち「ミュージックティーチャー」と訂正する…。そんな様子がコミカルに描かれ、楽しく観ていました。しかし、御手洗が「先生」という言葉を嫌いな理由について語るシーンに考える所があったので、紹介したいと思います。

「男なら男らしくしろって殴られたの。泥水を飲まされたこともあったわ。先生って言葉が嫌いになったのは、昔のつらい記憶を思い出しちゃうから。でも、(トランスジェンダーを隠さずにいられる)私は恵まれている方。みんな、隠しながら生きてるの。」

「男は男らしく、女は女らしく」が当たり前のように強要されていた時代。「自分らしく」生きることが許されず、隠して生きるしかなかったLGBTの人たちの「生きづらさ」を思い、胸が痛くなりました。

LGBTとは、レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダーの頭文字をとったセクシャルマイノリティの総称です。13人に1人の割合で存在し、その割合は左利きの人と同じとされています。

現在、生まれながらの性別にとらわれない性別のありかたが見直され、世界中で同性婚や、結婚と同様の権利を認める動きが活発化してきています。日本でも、たくさんの芸能人が、自らがLGBTであることを告白し活躍しています。しかし、実際は、いまだにLGBTに対する差別や偏見・いじめ・誤解が、学校や職場など様々な所に存在し、LGBTの人たちは常に「生きづらさ」を抱えています。自殺リスクは通常の6倍、うつ病の発症率も高いといえます。

少しずつ理解が広まってきた今の時代だからこそ、人を性で括るのではなく、一人の人として受け止め、「ありのままでもいいんだよ。」と声をかけられる自分でいたいですね。

《映画 de 考えてみよう》 「ブロークバック・マウンテン」(2005年・アメリカ)

アメリカ人は、この映画の題名を聞いただけで涙するらしい…。かくいう私も、鑑賞後、一週間は引きずりました。低予算で作られたにも関わらず、記録的な評価と興行収入をもたらした作品です。舞台は1960～80年代のアメリカ中西部。同性愛者が差別と暴力の対象だった保守的な社会で、惹かれ合う男性の主人公たち。望むように生きられない辛さと悲しさ、「自分らしく」生きられないということは、本人たちだけでなく、まわりの人たちも不幸にすることを考えさせられる映画です。ぜひ、観てみてください。